《修士論文要旨》

自傷傾向と不合理な信念との関連性

宮　本　愛　美*

Ⅰ．問題と目的

１．自傷行為について

リストカットなどの自傷行為は、近年、社会問題のみならず、学校現場、臨床現場でも重要な問題となっている。自傷行為は、無視できない問題であることがうかがえ、自傷行為への支援は急務といえる。

２．自傷行為の定義

本研究では実際に自分の身体を傷つける、間接的な自分を傷つける、自己に敵意を向けるような心理的攻撃傾向を「自傷傾向」と呼び、研究をすることにする。

３．自傷行為の認知・思考の研究

思考な主な例として、Walsh（2005）は自身の面接の経験から自傷者の思考を４つのカテゴリーに分類した。また、コンテリオとレイダー（1998）は、自傷者に質問していく方法で自傷を正当化する思考を挙げている。このような先行研究から、自傷行為の思考の特徴として不合理な内容であることがうかがえる。本研究では「不合理な信念」に注目する。

４．不合理な信念

不合理な信念（irrational belief）とは、さまざまな出来事を「絶対に～でなければならない」「～であるのが当然である」といった教条主義的・絶対論的に捉えてしまう非論理的な認知スタイル（不合理な信念）のことである。本研究では、先行研究より「倫理的非難」に関する信念が自傷傾向と関係していると考える。

５．目的

本研究では、自傷傾向と不合理な信念との関連性について実証的に検討する。特に、罪を犯した者は厳罰に処せられるべきだといった倫理的非難に関する信念を抱きやすい。

平成25年度　*社会学研究科社会学専攻 臨床心理学コース

Ⅱ．方　　法

1．調査時期　　2013年 7 月中旬、2013年 9 月下旬の 2 回にわたり、講義時間に集団法で、調査を実施した。

2．調査対象者　記入漏れ等の不備のあった20名を除外した148名（男性78名、女性69名M＝19.7歳SD＝1.5歳）を有効回答者とした。

3．調査内容

（1）自傷行為尺度

角丸（2004）17項目 2 因子「直接的自傷因子」「間接的自傷因子」

（2）自己への攻撃性尺度

齊藤ら（2008）16項目 2 因子

「自己への身体的攻撃傾向」「自己への敵意」

（3）不合理な信念尺度測定尺度短縮版（Japanese Irrational Belief Test-20：以下JIBT-20）

森ら（1994） 20項目 5 因子「自己期待」「依存」「倫理的非難」「問題回避」「無力感」

Ⅲ．結　　果

1． 因子分析

（1）自傷行為尺度

因子分析の結果、 3 因子が妥当であると考えられ「突発的自傷」「代替的自傷」「間接的自傷」と命名した。

（2）自己への攻撃性尺度

因子分析の結果、 2 因子が妥当であると考えられ「自己への身体的攻撃」「自己への敵意」と命名した。

（3）JIBT-20

因子分析の結果、 4 因子が妥当であると考えられ「倫理的非難」「依存」「自己期待」「回避・無力感」と命名した。

2．自傷傾向と不合理な信念の相関関係について

（1）自傷行為尺度とJIBT-20の相関関係

自傷行為尺度の下位因子である「突発的自傷」とJIBT-20の下位因子では、「倫理的非難」$r=.190$（$p<.05$）「依存」$r=.187$（$p<.05$）と弱い正の相関が認められた。

自傷行為尺度の下位因子である「間接的自傷」とJIBT-20の下位因子では、「倫理的非難」$r=.193$（$p<.05$）「依存」$r=.223$（$p<.01$）「自己期待」$r=.285$（$p<.01$）「回避・無力感」$r=.248$（$p<.01$）と弱い正の相関が認められた。

（2）自己への攻撃性尺度とJIBT-20の相関関係

自己への攻撃性尺度の下位因子である「自己への身体的攻撃」とJIBT-20の下位因子では、「倫理的非難」r＝.206（p<.05）「依存」r＝.211（p<.05）「自己期待」r＝.256（p<.01）「回避無力感」r＝.262（p<.01）と弱い正の相関が認められた。

自己への攻撃性尺度の下位因子である「自己への敵意」とJIBT-20の下位因子では、「倫理的非難」r＝.281（p<.01）「依存」r＝.117（p<.05）「回避・無力感」r＝.396（p<.01）と弱い正の相関が認められた。

Ⅳ．考　　察

１．自傷傾向と不合理な信念の相関関係について

１－１　自傷行為尺度とJIBT-20の相関関係

（１）突発的自傷とJIBT-20の下位因子との相関関係

心理的苦痛をすぐにでも解消しようと自分の身体を傷つける傾向が高い者は、罪を犯した者は罰せられるべきといった信念や常に他者が指示してくれないと生きてはいけないといった信念を抱きやすい事がうかがえた。

（２）間接的自傷とJIBT-20の下位因子との相関関係

薬やタトゥといった間接的な自傷行為傾向が高い者は、頼れる友人がいないとやっていけないといった依存の信念、私は常に業績をあげなければならないといった自己期待の信念、回避・無力の信念を抱きやすいことがうかがえた。

１－２　自己への攻撃性尺度とJIBT-20の相関関係

（１）自己への身体的攻撃とJIBT-20の下位因子との相関関係

自分の身体を攻撃する傾向のあるものは、自分はいつも完璧でなくてはならないといった自己期待の信念や、危険や困難には近づかないのがベストであるといった回避・無力感の信念を抱きやすいことがうかがえた。

（２）自己への敵意とJIBT-20の下位因子との相関関係

私は自分が嫌いだといった自分への敵意の抱きやすい者は、罪を犯した者は厳罰に処せられるべきだといった倫理的非難の信念、うまくいかないなら投げ出したり混乱するのは当然だろうといった回避・無力感の信念を抱きやすいことがうかがえた。